

# 佐伯 独歩 会報

発行責任者

古川 敬



古川 敬会長にきく

## 独歩水脈をさぐり、現在にあつた独歩作品の読

みの深さを

大野前会長から会長就任の要請をいただいたのはもう3年以上前になるかと思えます。

私のような浅学菲才な者にこの歴史ある会の会長が務まるだろうかと思つて参りましたが、一昨年因らずも仕事の関係で国木田独歩の生涯を紐解くことになり、独歩に関する文献を文字通り読み漁る日々を送ることになりました。

そこで小野茂樹先生の著した「若き日の国木田独歩」の中に、私が日頃研究をしている大正から昭和にかけての佐伯の文学者の代表的存在である阿南卓が独歩の「春の鳥」の続編を書きそれを独歩にもたらそうとしたと書かれてあったことを見つけ、独歩との距離感が一気に縮まりました。このことを機に、これも何かの縁であろうと会長職を引受けさせていただくこととなりました。

独歩が佐伯に残したものは「佐伯の春まづ城山に来たり」と書き光に満ちた佐伯の自然を世の中に紹介したこと、もう一つ佐伯における独歩

水脈とも呼べる文学の気風に溢れる人物を後の世に輩出したことがあげられると思えます。

それは前述した阿南卓であり、盲目の詩人加藤勘助であり、英文学者工藤好美、歌人中根貞彦であり、菅一郎もその一人であると言えます。

みな若き日、独歩の詩を吟じながら城山を逍遙し、緑の木々からこぼれる光を文学における印象派とも言える筆致で描いた独歩の作品に心を揺り動かされ、あるいは短歌や詩の世界へ、あるいは英文学の世界へ、あるいは絵画の世界へと進んでいきます。

国士館大学の中島礼子教授は「佐伯なくして独歩なし」と明快に述べられました。私たち佐伯に住む者は「独歩なくして佐伯なし」とまで言い切ることはできませんが、佐伯市が城山界限の道を「歴史と文学の道」と名付けた背景に国木田独歩の存在があることは改めて言うまでもありません。

また、この佐伯の文学的風土の延長線上に芥川賞作家小野正嗣さんの存在があるのではないかと考えるのもあながち穿ち過ぎではないのかもしれません。

佐伯独歩会はこういった明治の文豪国木田独歩と佐伯の縁を後世に語り伝えていくことを責務としながら、一方で今国木田独歩をどう読んでいくかを研究していくオピニオンリーダーとしての役割も期待もされていると思えます。

と、こう申しますと少し肩に力が入りすぎている感が否めませんが、とにかく国木田独歩という人物は直情径行でとても人を引きつける魅力あふれる人物です。そんな独歩の一ファンとして独歩を、独歩の作品を少しでも多くの人に知ってもらえるよう会員の皆様と共に活動ができればありがたいことだと思っております。ご理解、ご協力の程よろしく申し上げます。

## 中島礼子 国士舘大学教授との懇談

### 佐伯なくして独歩なし

「どうして独歩の研究を始めるようになったのですか」どうしても伺いたかったこの質問に中島教授は、「高校生時代、国語の教科書に国木田独歩の『武蔵野』が掲載されていました。国語教師が大変熱く語ったことが一つの要因になりました。大学で研究を始めたのは、研究の対象が逝去して五十年ぐらい経過していないと、プライバシー等の関係で研究することができないということが第二の要因になります。」と語られた。

独歩研究の第一人者としての自負と一つのことを追究してきた完成された穏やかさで、独歩についての説得力ある見解を拝聴することができました。知的刺激を受け、ますます独歩に対する興味と関心を喚起され、あつという間に過ぎた2時間でした。今回が四回目の佐伯訪問というところで佐伯にも深い関わりをもっていました。

この懇談のあと、ケーブルテレビのインタビューが汲心亭でおこなわれました。このインタビューの中で、

「来佐する1年前にワーズワース詩集を入手して、その詩集を傍らにしてワーズワースの描く自然と佐伯の自然を比較しながら、佐伯の自然を涉猟したのではないかと思います。独歩は佐伯に十ヶ月ほどしかいませんでしたが、この十ヶ月が彼の核を形成した時期だったと思います。『自然と人間』を丸ごととらえようと小説の資料を蒐集する時期だったと思います。」



聞き手の宮明さんの「佐伯の偉人矢野龍溪との関係はどのようなものでしたでしょうか。」の質問に中島教授は「生涯にわたって最重要な人物であったと思います。矢野龍溪が日清戦争の交渉団として、派遣されている間、矢野邸の留守居役をしていました。このことから独歩がいかに矢野龍溪から信頼させられていたのかがうかがえることと思います。」と答え、一過的な関わりでなかったことを語られました。

「佐伯と独歩との関係はどのようなものでしたでしょうか。」の質問に、「佐伯なくして独歩なし。このことが言えるかと思えます。」と語り、独歩が佐伯にこなかったら、独歩の初期作品は成立しなかったであろうし、また、明治の文豪として名を残すことはなかったであろう。宮明氏の「独歩は波瀾万丈の生涯を送ったのではないのでしょうか。」との質問に「たしかに独歩の生涯は波瀾万丈の生涯でしたが、悲観はしていなかったと思います。政治的に考えてものをいうようなことはなかったと思えます。独歩はそのようなことはできなかったというべきでしょうか。少年のような純真さをもっていたのではないのでしょうか。文壇の中の独歩は自然派の頭領ととらえられていました。まだ、明治の文豪ととらえられていました。独歩は多くの人に自分の作品は読まれると感じて、亡くなっていったと思います。その証拠にあれだけの追悼号はなかったでしょう。」と語られました。

「独歩の作品の魅力は何でしょうか。」の質問には、「独歩は自然だけをみて素晴らしいというのではなくて、自然と人の関わりと書いています。人間を自然の中の一生命とみて、作品を書いていました。」

明治の頃も読まれましたが、明治の頃には明治の読み方があり、現在には現在の読み方があるので、深めて読んでいくことが可能だと思います。」と語られました。現在の中に、独歩作品に語られていることをどのように新しい解釈をおこない、再評価するか。読む価値が出てくるのではないのでしょうか。

## 平成二十六年年度佐伯独歩会遠行 毛利家墓所

### 五所明神（神事 神楽 甘酒祭り）

十二月十五日（月）に今年度の遠行をおこなった。今年度の行程は独歩が佐伯にいた当時、慣れ親しんでいた場所である。明治二十六年十二月二十二日の日記に「佐伯は昨夜より祭日也、五所大明神の御祭なり 臼坪村は昨夜より休息に入りぬ今朝は又た綿うつ音も聞こえず、臼つく男も見へず、外見衣着たる若衆、村女の徘徊するを見るのみ 昨夜の月光の清くして澄みわたるは最も幸福なる田舎の祭の光景をそへぬ 多の情話各家の爐邊に起りたるなる可し」と記されている。

当日は幸い暖かな日で、どの場所にも快適に巡ることができた。十三時三十分、養賢寺門前に集合で十一名の会員が集合していた。境内を通過することは禁じられていたので、回り道をして、毛利家墓所を訪ねた。案内と解説は坂本氏にしていた。門は施錠しておらず、かんぬきをはずして中に入ることができた。以前は周りに高い杉の木が植えられており、森厳として薄暗い感じがしていたが、現在は、台風などで木が倒壊して、現在のように明るくなっているようだ。毛利家の代々の墓は大きな墓石でできており、他家の大名と比べても立派な墓であるらしい。比較的小さい墓は姫様等のものであるとのこと。毛利高政の墓は庵に設置されていた。以前、毛利家は森と名乗っていた名残が墓の墓碑名に残っていると、坂本氏が教えてくれた。

毛利家の家系のことについて、家に残されている古文書から説明してくれた。坂本家には、代々継承されている古文書や



国宝にも値する刀剣があるそうである。

午後二時過ぎに養賢寺から五所明神に向かった。神社では、湯立て神楽に備えて演舞する場所を設置していた。

二時四十分くらいになり、拝礼をして参殿した。三時頃には神楽をはじめる前に、久保田さんから佐伯神楽の丁寧な説明があった。佐伯神楽は、神職しか演舞することができないようである。また佐伯神楽は、神事の一部であるので、御岳流神楽のような煌びやかな衣装を付けて舞うことはないようである。神楽の舞の際に、御幣、長刀、弓、鈴、刀などの捕り物をもって舞うのを見るのは久しぶりである。一番、観客と演舞者が高揚するのは、綱切りと湯立て神楽である。綱切りは、綱を大蛇とみているようである。また、湯立て神楽は無実をはらすために、くがたちという神事をおこなったことに由来しての神楽であるようである。この舞をするときになると、観客を次第に多くなり、最高潮になってきた。

また、この日は甘酒祭りになっていて、糍屋さんが甘酒を作って、参加者の振る舞ってくれた。昔から伝わっている風習なのであろう。この風習を守り継承していることに敬意を払いたい。刀、弓、長刀、御幣、鈴などをもって演舞した約一時間三十分の演舞を神殿でおこなった後、湯立て神楽を境内にておこなった。沸騰している鍋の湯をかぶって舞う、湯立て神楽はたいへん迫力があつた。（日記は原文通り 外見〓よそいき）



ワカエビスカツギョ

若戎活魚センター

〒876-0801 佐伯市葛港1

Tel 0972-23-1773

## 城山などの高台で瞑想した独歩から慈円の企画した『治承物語』を窺う

熊本学園大学教授 尾崎 勇

『徒然草』二二六段で、摂政関白を出すことができる藤原摂関家である天台座主の慈円が、実兄の兼実にならしている行長を世話して、琵琶法師生仏の協力をえて『平家物語』がつくられたと兼好は綴っている。この二二六段の兼好の言説を起点にして、慈円の著『愚管抄』や慈円の歌そして文書をもとに、比叡山延暦寺の別所の西山で原『平家物語』の『治承物語』を慈円が企画・創出した経緯を拙著『愚管抄の言語空間』（汲古書院・二〇一四年）で論じた。この拙著に「国木田独歩の小説から―結びにかえて―」の文章を添えて、独歩の小説の方法から慈円が『治承物語』を企画する心情を照射した。その要旨を記したい。

国家有為の人間づくりをモットーとして学歴によって人格をはかる当時の立身出世主義に批判的であった独歩は、『忘れえぬ人々』に代表される平凡に見える人に意味を見いだし、斬新な「文学空間」を構築する。佐伯の渡し守を主人公にした「源おち」や山口時代の独歩の恩師の中山伸一先生をモデルにした『日の出』が典例であった。一方、世俗の名利を嫌った増賀のような聖を憐れる慈円は、兼実なきあと我が藤原摂関家の長になり、世俗にもまれる境涯に陥って生き方に煩悶する。そのため増賀と同様に横川に隠棲した源信の弟子の源算が開いた西山に身をひく時期があった。その西山で慈円は大乗菩薩戒の教えから、僧俗・貴賤なく迎え入れる勸学講をひらくとともに「あそび心」から庶民の労苦を気にせず政治的陰謀に明け暮れる朝廷の批判をこめて、朝廷政治を壟断する平家一門を討伐する源頼朝の物語の『治承物語』を企画する。『治承物語』は既存の『大鏡』・『今鏡』の歴史物語の系譜につながるものの、「いくさ物語」になった。当時としては破天荒な作品である。それは、西山の高台からは眼下に洛中全体が俯瞰できたからであった。そもそも人は高所から人生

を俯瞰すると、その全体をパノラミックに把握できるので「認識のプロセスの完了を感じる」のであり、それを感じた瞬間に人は詩人なり、語り手になり、哲学者になり、予言者になり、創作者になる」（野中涼「瞑想の瞬間」『歩く文化 座る文化―比較文学論―』早稲田大学出版部・二〇〇三年）からである。『治承物語』を企画するに先立って、まず西山で慈円は源頼朝が王法に参入するのは道理であると思惟した結果を『慈鎮和尚夢想記』にしたためており、その後、『治承物語』を取り込んで頼朝が開いた鎌倉幕府の四代將軍に慈円の甥の子である頼経が就くことが「末代の道理」と揚言する『愚管抄』という歴史哲学書を著わしたのであった。この経緯を論じたのが、拙著『愚管抄の言語空間』である。

ワーズワースの影響をうけている独歩は、よく登っていた大分佐伯の城山で思索して、『春の鳥』が創られた。モデルの障がいのある山中泰雄氏は六十七歳まで存命しているのを「石垣から身を躍らして少年は自殺した」と作為し、夭折することで少年は「天使」であると讚美したのであった。それ以外の山や海岸線の高台から眺望していた独歩は、インスピレーション体験から斬新な「文学空間」を構築する。『病状録』のなかで独歩は、「雲を見て空間の無限を恐れ、海を見て空間の無限を知る」と告白し、また「夢は楽しき者なり。余にはそれが唯一の慰藉たる事もありし。」との言辞がある。

慈円は自己のみた夢を信奉し、その夢が符合する時運をもとで『愚管抄』を叙述し、歌で「つねに見ればむなしき空の有物をそれにかくさむ行末もかな」と詠じ、広がる空間に心を慰められる将来であってほしいと表明しているので、独歩の小説と通じるわけである。

有限会社 ヒロ

裕

佐伯市中村北町1-12

Tel 0972-22-2917